

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	スナップ：0才児～五才児の発達と実態
Author(s)	児童の言語生態研究会, ; 瀬底, ノリ子
Citation	児童の言語生態研究, 17 : 138 - 139
Issue Date	2009-07-10
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045216
Right	
Relation	

スナップ

0才児〜五才児の
発達と実態

瀬底 ノリ子

「ぼくを見て」

◇
少しずつ保育園での生活に慣れてきた0才の赤ちゃんクラスでの出来事

まだベビークラックに入ってねんねのK君は皆の人気者。手足をバタバタさせ、身体いっぱい笑う姿が見たくて保育室を通り過ぎる誰もが「K君！」と声をかけます。大人も子ども、人は愛らしい、美しいものに出会うと瞳が大きく光り、えも言われぬ微笑を思わず浮かべてしまします。不思議に呼びかける声も明るい華やかな音色になります。

それをしつかり見届け、声のひびきをききわけたH君（一才三ヶ月）。0才児室への来訪者の足音がすると、おぼつかない足取りで、時には大急ぎのハイハイで、必ずK君の後ろに並んで座ります。愛らしい者に向けられる輝くまなざしと愛の呼びかけのシャワーに共に

浴して大満足。

それに気づいてから、私たちは、まず「H君！」と名を呼び、ほほえみかけることにしました。

◇
H君にとってK君は大切な友達。K君が立ち上がり、つたい歩きを始め、一歩一歩の自立歩行を始めた頃も、いつもそばにいて、H君と歩調を合わせ、手をつなぎ、転んだK君を助け起こすH君の姿がありました。誰もが「H君やさしいね。」と声をかけます。

◇
自由に歩き回り、走り回れるようになった二人。K君といつも一緒にいたいH君に、K君は時々「あっちに行つて」。H君は呆然と立ち止まり、口をへの字にします。

「H君、ボールけりしよう。」
そんな時、一対一のボールけりに何となく

誘いたくなります。

おみやげ

ふつと感じる肌寒さに、セーターのぬくもりが恋しくなります。

「せんせい、これ、おみやげ」
このところ毎朝走って登園してくるYちゃんの手にながらわれている「おみやげ」は、くしゃくしゃになったピンクのさざんかの花びら。冷たい湿った花びらなのにかすかなぬくもり。一日をピアノの上のトレイの片すみで過ごす。

Yちゃんは、毎朝、昨日の花びらのことは忘れたように、
「せんせい、これ、おみやげ」
握りしめたてのひらには、くしゃくしゃのあのさざんかの花びら。

数日後、朝、所用でYちゃんの毎朝の通遠路

を通りかかり、あつと驚きました。満開のさざんかの花が道いっぱいにこぼれていました。冬の透き通った光の中で、花びらは一枚一枚、生きて発光し、あたりはピンク色に輝いていました。しゃがんでYちゃんの目の高さになると、ピンクの光は身体全体を包み、指先まで光に染まりそうでした。

Yちゃんのおみやげ“は、光だったのです。Yちゃんはその小さなてのひらにこのピンクの光をにぎりしめて走って来てくれたのです。

子どもたちは、小石や木片、砂場のすみで見つけた貝、草の実や木の実、様々なものをボケツトにつめこんで宝物にしています。それは、子どもたちが体感したあの世とこの世を結ぶかけがえのない鍵なのです。

「寒い」は「やめろ」「やめろ」「やめろ」

光の春。梅の甘い香りがほんのりただよってくる朝。子どもたちは冷たい風の中、ほつぺたを赤くして元気に登園してきます。

三才のSちゃん。おばあちゃんと手をつないで登園。ママはずっと家にはいないのです。

「寒い、寒いと言うものですから……」

Sちゃんはまんまるになる程、着ぶくれしています。上着の下はセーター二枚、とつくりシヤツ、長袖のアンダーシヤツ、ズボンの下はタイツに、なんともひきき？

「さむいの。」

おはようのかわりのあいさつ。

「ストーブのそばに行こうね。お日さま、ポカポカよ。」

ストーブの前の椅子に固まったように座って、友達の遊ぶのを見ているのかいないのか。「上着脱いで皆と遊ぶ？」

首を横にふり、

「さむいの」

「そうか、Sちゃん、さむいんだ。先生とお散歩に行こうか。」

こんな時は特別。

「おんぶする？」

うれしそうに背中に乗ってきました。Sちゃんと二人だけの散歩。風は冷たいけれど、明るい春の日ざし。Sちゃんの胸のあたかみが背中伝わってきます。

「寒くない？」

何の返事もありませんが、ぎゅうと背中につかまる力を感じます。

「あつたかくなーれ」

のめちやくちやな歌を歌います。

その辺を一回り。もう一回り。Sちゃんの胸のあたかみが増してきます。生命が交じり合い、動き出します。

「もういいよ。」

Sちゃんのあたたかい優しい返事。園に着くと、するりと背中からおりて、上着を脱いで、

セーターも脱いで、友達の輪の中へ入っていききました。

「寒い」は「さみしい」といことば。

せなかをトントントン

Aちゃんは保育園のおひるねの時、なかなかねつけません。

「トントントンして。」(背中をトントントン)

「わかった。百回トントントンしてあげるから、心の中で数えていてね。」

添い寝をしつつ、背中をトントントン。私も心の中で、秒速ほどの速さで一、二、三、四……。百まで来た時、Aちゃん、ぱっちり目をあけて、

「百！」

とつぶやいたのです。

「ずっと数えていたの？」

ニツコリ笑ってうなずくAちゃん。

「それじゃ、もう一回」

作戦を変更して、今度は四分音符ではなく、二分音符で、いち、にい、さん、しー、ごー。Aちゃんだんだんねむくなる。三十までいったら全音符。三十一……。三十二……。五十になった時には、もう完全に夢の世界でした。一緒におひるねしたくなりました。

(神奈川・青葉台保育園勤務)